

823
MS. N2

溪江入集

桐壺

823
MON2

Nakanoin Michikatsu

Minko misso

[illegible]

説と人記付さるる所ふそれとていふとて廣く世に
傳つてわづかの後人にとさしめんとの事ふありされハ
ふりて人のあさなりけりけりけりけりけりけりけり
うゝとふ月れ中の九月也是の初めとて記し此後低に
入芝と名付さるる所なり

休氏松注

桐壺

一 御うゝ天下りゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とて御おなりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ下福に衣衣次と進や及と人記
天下といつゝ一人之行自進及至之御中を御しゝゝゝゝ

一 度ゝゝゝゝゝゝ

歌記揚き此之故更先發此語中

一 びゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

儲君者至也其鬼雖深功從不可恒此君之香馨之私物可
取限此具かのつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一 ありけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

而氣りゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一 きゝゝゝゝゝゝゝゝ

きゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

抄ゝゝゝゝゝゝ

あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一 りゝゝゝゝゝ

文をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

題をのゝゝゝゝ次の御着れゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
慈あゝゝゝゝゝゝゝゝ

以抄少川而肩付

一河 河海抄

一花 花鳥雜情

一果 果心

一秘 三西家之抄 称名院之義

一義 三光院之義 以内式ハ被出抄之而或市少書之而

然而若葉之下ヨリ字拾十帖ハ市少書ハ義ト裁リ桐葉ヨリ
羽石奏マテハ被抄ノ紙義ト云中ノ云リ義中ト書之ハ内私ト
出之者市今案之義ハ亦被抄不領之而肩付云々ハ市
注加之被抄也後有テ市今案ノ注付ハ私注ナリ

一或抄 以外一本ハ以内御院ト有ハ称名院之義

光源氏物語

一 全篇光源氏君之變と詮用ト以仍名之

或説云ハ被抄トハ光源氏物語ト云々ハ一ハ光源氏ト云
物語ト云々ハ光源氏物語ト云ハ光源氏ト云ハ

是今案ノ義ハ 是式ヲ寛弘六年之日記ハ光源氏物語ハ
市今案ノ義ハ光源氏物語ト云ハ光源氏ト云ハ
光源氏物語ト云ハ光源氏ト云ハ光源氏ト云ハ
光源氏物語ト云ハ光源氏ト云ハ光源氏ト云ハ

作者

是式ハ 又然前守友永為時ハ右馬頭為信女系為九有

從四上右中將 号院中納言 兼平 兼五 為頼介人

良門 利基 兼輔 雅正 為時 雅親

高藤 勸修寺祖 清正 女系人 女子

上東門院之女房
所人ハ是式ハ
市堂園白
右馬頭先宣教室
母右馬頭以乃信女
一院為時姨雅要

註云心者身之主宰也意者心之所發也實其心之所發欲其
一於善而無自欺致推極也知循誠欲其所知無不盡也格至
也物猶至也窮至事物之理欲其極處無不到也此八者大學
條目也

物格而后知至々々而后意誠々々而后心正々々而后身修
々々而后家齊々々而后國治々々而后天下平

注云物格者物理之極處無不到也知至者吾心之所知無不盡也知既盡則意可得而寧主意既寧則心可以而正矣

自天子以至庶人壹是皆以修身爲本其本亂而末治者否矣

高江流のうへへ入る。月江脩家と毎江流天下江平にそ
 るる江明をこけ物流一般の大空へ是と云と云り流は物流の江
 けそはれ向き高江ちうへへとそそのふ是と云と云し

以爲然。根於莊子寓言。以寓言者。以已言備他人之。名謂之。

註云又根の、系と訓するは又内篇外篇雜篇十五以上有

此二篇内篇理之根本とあり、これを相違より句を分けて、此
七折は、此より下、雜篇なる理あり（此等も悉く此を根と見ゆ）

卷之序
文粹文法依司馬遷史記
本記十二卷
自相繼至白文

世家三十卷 以寧治十帖比之
列傳七十卷 以並擬之

此外於卷七文又句又有司馬文法

一字磨於八春秋尤氏傳之法是則筆誅曰物

あふはまうそく人のり狀とかめうくうそくは物候ふ
てとくふとくの一さうてははの敷わうこふう

此の應永殿ハ資治通鑑之文勢司る邊々同ハ其のすゝ
 是ハ其のすゝて何の氏批判するものなる氏よりや

毛詩三百篇之中以閨睢婦人之德為始以思无邪為一部之
大意以物類又如此

尚書十三卷

一部在謹之一字
は物なり加ふ

礼記

一語在毋不敬之三字以物類之類

周易

一部在時一字ハゆゑなり

於內曲者

面依天台之法門故六卷及六十卷

內證有密法

又專示因果必然之理

凡内典外典子方由して
 此解詮へ仍推此の方便を授

一代指其内之典之其意負けあひてけ一物よき
物に似るに格七字の代りてくさる世の美法哉くわき
あふるの明流ふ向ふるもの物といふ然則天地は始れり
況んやふあつてとやられふつて盛者必衰會ふる難
生老病死有為轉變の理代流るるはいつくはあつてさる
お常後之法文とてか悩則菩提生死即涅槃之負け明を
か悩お菩提之文は物成之太きと

一 或抄云あかしに形より富言は摸して何る物成といふり
まうしてえ海を流るるの形よりかて一字の塵點はま移るり
但形より富言のまは氏に皆ま其代記して久留してを後わり
といふ今は物成は般若の形よりなりと案てといふは氏形より
のまよりあつてむりてくさる

一 抑男女の形よりくさる開羅蘇斯之德生道治世之始なる
くさるりその中よりあふ流凡のくさるぬなりと云はれり
是くさるりわいあふるあふるまれつてくさるあふる
人よりてくさるくさるくさるてに義れ智の大徳より結果

菩提くさる海よりあふるくさるては物成はくさるて何の指し切く
くさるくさる海よりあふるくさる

物語時代推授

一 相違之希と述ふは
貞観の中よりあふる今は物成はくさるくさるくさる
史よりくさるくさる 又通鑑は因威列王よりくさるくさる
漢の初くさるくさるくさるくさるくさる

一 案云前漢石門より案は物成はくさるくさるくさる
願よりくさる補の理よりくさる案之現因の前漢書と史記時代
代よりくさる補の理よりくさる案之現因の前漢書と史記時代
物成はくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさる
くさるくさるくさるくさるくさるくさるくさる

一 相違のくさると述ふは
くさるくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさる
くさるくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさる

一 物語の時代の醍醐末茂村とくさるくさるくさるくさる
くさるくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさる

氣せられりるは清き入石園白 御堂後 興中、氏加、人らとていふ
 此物世々ありてはものゝかり 元弘、五、七、と加ふるありと

柘栲の院に一椀ありて
今乃成りて自筆なりと
悲しきなり

傳々大監揚光仍ハ本年ハ在
授合九拾ノテ敷ル年トモ
ハ

二柔師

伊房本

冷泉中納玄明隆平

堀河大長寺

後房号英表紙
丸太長妻后

從一位蕭子中

土御門右大臣女
早良宮

法性與圓白

唐紙小卓紙
尚待後年

五象三臣後成本

京極中納言

定敬

芳名表紙

[illegible]

そふれ物と云んでれふさふ六右人の奥さあり

河古源親^う仍^は中^{ちゆう}（是^こハ^ハ少^{せう}き^き所^{しよ}ハ^ハ河^か内^{ない}也^や）（或^{ある}ハ

[illegible]

在
 仁
 我
 當
 係
 八
 家
 妙
 今
 青
 糸
 紙
 と
 用
 い
 月
 々
 宗

明日は海を渡る皆河氏に参るに在

乃の所を歩くは月夜に花散るを思ふ

有德之

入るうりうりそんり多の速く速くの所より所へ

[illegible]

分有興と名付し、其の爲に、其の興の

不復見之

復成之六百萬次合則云我為九と見たり

之故云源氏物語ハ景式部歟

いゆれとらんはふり
うにふしうく海をそ

爲竹塢之席、色如木、至宝八源氏物語よ過る只ありけり

曉長明寺名抄よりそへて撰りしむるものなりと云ふ

[illegible]

我竟也了。臨別時，之乎者也，如雲泥。

[illegible][illegible]

及中、西、各、學、士、
多、以、數、考、之、書、
而、我、士、亦、有、其、
一、

[illegible]

[illegible]

卷之七

[illegible]

天台之教小四辯之法門有二有門二空門三亦有亦空門四
非有非空門也一切言教ハ此四辯ニ出ス是よりして凡
四辯外別立法性も又ナリ眞実ノ道理ハ言教ノ外ニ有ル
毛約篇名之例有

毛詩正義玄名篇之例不遍五卷取一或偏舉兩字一或全取一句偏舉則或上或下全取則或尽或餘久

木
名滿方院
由
愛玩海
別系
四十八
糸

相無

け巻と一巻つかざんといふ或ハ奥陽有^りけ名謬^ト説也一巻二名と
 此^ハ其^ノ名^ハ何^レ哉^ト乃^チ相^ノ違^ハ之^ノ更^ニ衣^ハの^ノ誤^リとす^ル名^ハよ^ク
 若^シ其^ノ名^ハ其^ノ名^ハ相^ノ違^ハハ大^ニ内^ニ立^テ舎^ノの^ノ代^ニの^ノ淑^ノ京^ノ令^ノと^ノ源^ノ氏^ノの^ノ毎^ニ名^ハ
 けあり^ニ何^レ其^ノ名^ハあり^ニ

びきり涙を流して、十二歳になるまで、この作業の初めは、
 あまなかりで、と、は内は、毎日、送る、と、あまなかりで、
 り、と、い、い、帰、り、を、ふ、は、十、六、の、り、に、
 り、と、い、い、帰、り、を、ふ、は、十、六、の、り、に、

九嬪比九嬭
婦言婦功也

世七世婦

主却喪祭與賓客

婦服也明

其能服麥旅人也

九賓酌令昭容昭儀昭媛修容修儀修媛

荒容荒儀荒媛

漢書注評進御於王也

尚書中三五

子之欲師其母以從

註云卿八侍也

後漢書曰修內職為右正

宮圍同躰天皇八十一女御序于王之燕寢。女御八十一元士比。

名ハ倭氏林の中ニシテ
 高ク立テ居ル所ニシテ

由は信行のくまをいふ衆人の外きくんと相を治す。

三夫人等は三乙女唯してゐる女のみありあはれ

なまの海はなまの海とよめる

[illegible][illegible]

一胎媛と曰く
 今そりて玄ふあり
 韻令

邦人之依倚する所以援助よそと云ふことハ我々のあつてを

つれなくさうしてはなよわらうつたりとくし一候客とハるらん

清々として何れも立派な人なりけり

一 依所ては是も同く地のあるところを教へんを

容とて竟りて終り
是はふもつゝ久
容保りて
後
あ

之乃一竟何足
公遂以法之
下之乃一竟何足

一氣媛是此氣御とする
極める人こそ此よりいひわたる

く元道も女中の方へ嫁し玄九人の惣名をも後へめけり

極力之也。其所以時人婦德。婦容。婦言。婦功。

てのまゝに嫁いせぬの正しき心はありて江戸参り

しそ、女のつゝをみても、ふりかへて、常習といふ

て
保のるはうき

之次廿七人 世婦より廿七人 少子と衆とハ父母兄弟を記す

時久きものけ成ハ新音の時の名ハ新又嬪ハ新天子を何

とそ付の衣服のて何とみよりそ次八十一女御あり燕

寢る席とていふりり又天子の御寢なり付申して此を

ふふふふふふふふふふふふ

[illegible]

死

女御ハ五位以上二位三位ニ到ルモノナリ

日本雄略天皇七年求雅媛

卷上道

為女御是始

日本紀
十四

女御入内有勅別當^{如堂代親王}上卿奉勅給券之作史令之宣旨
天慶九年以元廿年在躬為女御養子所當必付日本ハ其前
と知りおとあふふあふあふとあふれとよのふあふあふ

極女御之教自今少多なり文徳天皇よりなりと云
稀後

更名之變

各

更家之富之者

一禪御鏡

是漢朔より至漢武帝始テ是ヲ重フ

漢尹列傳卷之

史記云。我より漢武帝。待衛する所を志ありき。即ちて
休。是。亦。代。え。られ。く。も。所。く。も。文。女。と。き。く。一。と。後。と。よ。寢。下。衣。
え。て。上。衣。下。衣。え。られ。又。く。く。く。く。く。別。家。即。ち。て。衣。下。衣。
より。有。き。衣。下。衣。を。け。外。の。史。記。書。く。休。者。く。海。ぐ。く。く。
日。本。ハ。仁。明。天。皇。永。和。三。年。正。五。位。上。紀。明。卡。し。魚。按。後。四。位。
下。為。更衣。是。始。清。冷。殿。記。云。更衣。其。實。十二。人。以下。不。改。其。
教。尚。傳。宣。下。諸。司。聽。著。禁。色。一。は。く。く。教。十二。人。と。わ。れ。く。も。必。き。く。
教。介。し。あ。け。く。く。く。く。く。く。く。女。女。く。く。後。の。さ。く。向。く。く。
ハ。教。中。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。の。女。と。て。あ。れ。く。内。侍。の。く。く。
の。後。自。ら。衣。下。く。て。衣。下。禁。み。け。ゆ。く。く。く。く。く。く。く。内。侍。宣。
と。く。く。極。衣。衣。下。息。亦。向。く。く。名。女。く。く。く。く。の。女。あり。これ。
く。後。く。
所。息。亦。く。く。く。く。く。く。く。の。女。く。く。く。く。く。く。く。く。後。く。

[illegible]

世御五人
更衣十九人
中宮以下
都合廿七人也

私以內為子親王八光孝之皇女（為雲女）相佩芥
桐葉帝之右實名露乳之分

女侍三人
秉香殿
四文每
蕭景殿
坐散星師一人
八文每

更衣二人
相壘
後涼殿

后二人
太后
弘徽殿
女院
毒

此物乃一少卿所不也
女名下あもるは女也
是はあり

いふは名にちよと後日——主人以下云々を第一に
してその土地のふれるの塩湯おあ——て税金せられぬ
是れを肉はあ——男は後日あは——くあるは是れを塩の
ふふ男か天下あてはぬて是れをく男の時天下あ
たの政をあるはゆふとあるは

佐高のそとにうろのふかきうろにぬめぬめやんまの
りふかきうろにぬめぬめやんまの

新は河の相違のあやをさうさうさうとあはれあはれと
とてあはれとてあはれとて

すゝめ
級如 スウシ
昇紀
時 トキメリ
日と

わらうやうに日本にめしき字のありといふ時
は、あひうをいふとき、たゞ又、数ある

うゝうゝうゝうゝうゝ
 七
 けいふ御史家のゆふに
 七

時或りてうゑをとりひあへり人長可し此女のみ御あり
 ありやうゑの相違の文字と曰く程ある大納言の程あり

るに衣の使あり 何れく御とのありしやうふあり
ありききりやうり

ありやんともあつてきれ ありの帝の衣をて

ともうききりやうり 衣をてきれとけり衣をてきれやう

ひききりやうりやうりひききりやうりやうり

りりやうりやうり ワリナカ 衣をて ワリナカ 衣をて ワリナカ 衣をて

やうりやうりやうり 衆を 衆を 衆を 衆を 衆を 衆を

兼樂侍宴を用服 長恨介侍 畫同輦夜 長恨介 春宵苦短日高起日上

あかきりやうりやうり 長恨介 春宵苦短日高起日上

りりやうりやうりやうり 長恨介 春宵苦短日高起日上

にのつらうりやうり 長恨介 春宵苦短日高起日上

りひききりやうりやうり 長恨介 春宵苦短日高起日上

或説をききりやうり 長恨介 春宵苦短日高起日上

何れく衣の脱けりや 長恨介 春宵苦短日高起日上

ふてききりやうり 長恨介 春宵苦短日高起日上

坊のききりやうり 長恨介 春宵苦短日高起日上

まききりやうり 長恨介 春宵苦短日高起日上

くききりやうり 長恨介 春宵苦短日高起日上

へききりやうり 長恨介 春宵苦短日高起日上

漢高祖の名品名は 長恨介 春宵苦短日高起日上

名者高祖微時妃也生孝惠帝女魯元公主呂台之父臨個侯

呂公謹呂宣王 呂名は高祖の妃也はは微服と

へききりやうり 長恨介 春宵苦短日高起日上

王如衣衣はつけききり 長恨介 春宵苦短日高起日上

て四皓とてひききり 長恨介 春宵苦短日高起日上

弘平殿と名服 長恨介 春宵苦短日高起日上

義高祖微服の女二ふき 長恨介 春宵苦短日高起日上

はききりやうり 長恨介 春宵苦短日高起日上

た多呂名兄二人皆高祖 長恨介 春宵苦短日高起日上

抄云 程子八人のみあり

曹娥

自序

白臧托

代王植 爲文人

淮南王長

燕王建

けり今更成せん是も唯して物成るる相違帝は

みへん

朱荏院 冊

大德院

世相更迭

四宮

海叢音殿上御

冷泉院 卅曆雲院

重刊部

師玄

八

武部

是より人の脚毎にあらん史記のありけり相違御川とて紀
ふ所にて殿敷の石名と品名とありけりはたそふなり

かゝるもの

つゝんまにわさるゝ哉を恐るゝ字のふあり

但より一是より衣の巾（エリヨ）叙（エリヨ）富の系（エリヨ）汗（エリヨ）を

知光

足すらんといふ

きんぎょ

吹毛束疴

好生毛羽惡生疵 乐育大作路

夕紙きあよりしほ、
按てゑ物紙毛を飲
疵とてゐるゑる

さうさうとありい
はあはあといふやうに

凡それみまゐるとふとあはれうらやハあへうすゆくととて

[illegible]

そしそゆありひたうふまよは是ハ此門の此電也取よ今

先々ねめし浩白中くゆふ夜みまゝをり

神々の神

五舎の内淑室舎

衞の御殿

5

り 良の角ふちてはうふに倣殿藤景殿宣

耀文のむねをいふに、
村よの時宣耀文は、
女界ハ一衆也

府仰云云の如く
 所きしとて曹司
 局日るをり

切る厚板をうてゐる

みづこのくさくさのうらぶら

24

村江村玄耀 友の女御 友をよこつてせめて

ときつに
あまうた
中々
あまうた
右行
に
傲のう
め
取
着
よ
お
う

常々心ゆくまで読む有り
破例

とろろ
ふたつ
おのれ
の海

宛光 旧宝篋中納金胡忠女

本意ハ村と御時中交好してゐるその間のくあうこの所

ふ名海をよるにゆるぎなきて此所より行くときぬのちそ

多うとハうと
 元之ハ海ハうと

其つては
 経年より
 今高時不
 用此高ノ
 義可然
 元張心ハ

同之
義
仁
村
と
字
の
義
教
之
又
或
抄
云
雷
月
抄
云

みよのせそいさろくきさろくねりぞろきとんと

又紫と物よひきつる^きき^きの^きゆき^きてゆあやせらる

うゑに不慮のやうな事

物力なきを以て相違ふ所あり

[illegible]

水島をきくやと或人よりきくは後漢の何と名に云ふ漢書恒帝

[illegible]

竊聖書
卷之八
遊
婚
嫁
の
礼
に
あ
り
て
按
巫
靈
之
道
に
あ
り

交正益通

作
打五更

[illegible]

ふりて
ふりて
ふりて
舞
名はるるをたけりといふ

は衣てせし後由小力命婦よ逃くへのそわそわ

天海をくぐりぬぎて又先帝の宮を

春通也
まふの女御に御教の御方々として相違の文衣の

天のふりそくをわたりて

[illegible]

新古今正統記三勅旨の事より正義なることと

何
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

えふねめその妻なり

さあ、このついでに女中さん

凡不_レ而_レ也_二々_一乃_レ致_二教_一之_レ可_レ

思を日々に
我を去る

後冷飯

後方より

海客

人子

策之

敬愛友の如く
ふりておとろけ

[illegible]

源氏の君と云ふ

字子三 宋王 禮 例

冷泉

四
融
報

花山集

天曆之御時内裏より爲正親王所養ふ所なり
好古

一、二のふせうりしよ

公徴受後の一を以て後、朱存氏とす

龍子如友

内花寮

細友

後帝女ニアリ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

八

助及

おとあひさるうた

わふゆきふてめあふふ

つゝ今も

源氏君と紫の及より相違ふを遠例し

その年と時代とを以て知るを得るなり

息所ふふふふ

はゆたふに誕生の後必は若かり定むる例に

[illegible]

昨読了
八木子史
少卿云々

アキハタ

相違ふ衣の星を人退かんと云ふを

うづつみのわがやう

帝は其の如く爲りたり

ふくふく

更衣此曲の奏して更衣と退かたるるをあら

八海をめぐりて退むらん

ふらふらなりさん
あゝ氣はよく申す
めれとぬえの屋

て退るにふに退むの時をうては

いふよりそをうたふ所、宴に退出し、此のうたは、
いふよりそをうたふ所、宴に退出し、此のうたは、

のりわりの花をたわぶるにうり

新とみ 取押 五の 七と 九と 十と

あつちのきんぐとて

かみづいせ

あひそふ

又ふれよふふふふふふふふふ

本通りで、
売りと
有るもの
は、
漢文の
中

かきりあはなみ

五門の格紙

或抄禁中ハ市ノ所ナリ

いふやうなうけあふの

相安の祈禱書の多し

勢を以て下を御し之を治す

七

時よりふりあひあり
 嫌憎とふりあひあり

いふなり

何より

三才の正當なるを

きりぎりす

以来ハ何處ニ

前後不定の事

海

めしりし海より

病人の処置

五ノ字

語
今

多くと讀みそつち

18

弟

かゝるうゝうをいふにふれふのや

りふふふふふふふふふ

うれれをりき 永耶人うらむと ぬるめと下敷

正神もさうに祈り

いさふふと 市川の内へうらうらと 文の病とさき

てらふれせん 輦車 車輪をて牛とさき

和祕抄うらうは 輦車とて

祓負合と輦車 注云輦車 輦車は輦車に云

輦 説文輦車 在車前也 漢書注 駕人必の早

近云難式云 輦 少物で内裏へか入るなりと云

夫人のうらう内裏へ置明友後深友のうらう 後深友のうらう 西文云親王太長中老翁人

位ハ名求の陳と云 但娘女御及深王太長の後深友輦

物ゆり 名求陳と云 西文云親王太長中老翁人

馬と云女親王女御尚幼いといふ小童人云云 周門重

名と云 今案周門殿後深友ハ内約ふなり

ハ殿 東の直陽門の内より後深友ハ西の陽明門の内

より後深友よりいふなり 後深友のうらうと云

かゝつたせめと云うつなり 後深友のうらうと云

内親王ハ後深友のうらう 後深友のうらうと云

の所ハ中より内親王の周門と云ハ中より門と云 或抄云今相

違の云云退むのうらう 中より退むのうらうと云

輦ハ名と云 輦車ハ 輦車ハ 輦車ハ 輦車ハ

と東門の南へ入るなり 又云輦車ハ 輦車ハ 輦車ハ

永耶人うらむと ぬるめと下敷

正神もさうに祈り

市川の内へうらうらと 文の病とさき

輦車 車輪をて牛とさき

和祕抄うらうは 輦車とて

祓負合と輦車 注云輦車 輦車は輦車に云

輦 説文輦車 在車前也 漢書注 駕人必の早

近云難式云 輦 少物で内裏へか入るなりと云

夫人のうらう内裏へ置明友後深友のうらう 後深友のうらう 西文云親王太長中老翁人

位ハ名求の陳と云 但娘女御及深王太長の後深友輦

物ゆり 名求陳と云 西文云親王太長中老翁人

馬と云女親王女御尚幼いといふ小童人云云 周門重

名と云 今案周門殿後深友ハ内約ふなり

ハ殿 東の直陽門の内より後深友ハ西の陽明門の内

より後深友よりいふなり 後深友のうらうと云

かゝつたせめと云うつなり 後深友のうらうと云

内親王ハ後深友のうらう 後深友のうらうと云

の所ハ中より内親王の周門と云ハ中より門と云 或抄云今相

違の云云退むのうらう 中より退むのうらうと云

輦ハ名と云 輦車ハ 輦車ハ 輦車ハ 輦車ハ

と東門の南へ入るなり 又云輦車ハ 輦車ハ 輦車ハ

永耶人うらむと ぬるめと下敷

正神もさうに祈り

市川の内へうらうらと 文の病とさき

輦車 車輪をて牛とさき

和祕抄うらうは 輦車とて

祓負合と輦車 注云輦車 輦車は輦車に云

輦 説文輦車 在車前也 漢書注 駕人必の早

近云難式云 輦 少物で内裏へか入るなりと云

夫人のうらう内裏へ置明友後深友のうらう 後深友のうらう 西文云親王太長中老翁人

位ハ名求の陳と云 但娘女御及深王太長の後深友輦

物ゆり 名求陳と云 西文云親王太長中老翁人

馬と云女親王女御尚幼いといふ小童人云云 周門重

名と云 今案周門殿後深友ハ内約ふなり

ハ殿 東の直陽門の内より後深友ハ西の陽明門の内

より後深友よりいふなり 後深友のうらうと云

かゝつたせめと云うつなり 後深友のうらうと云

内親王ハ後深友のうらう 後深友のうらうと云

の所ハ中より内親王の周門と云ハ中より門と云 或抄云今相

違の云云退むのうらう 中より退むのうらうと云

輦ハ名と云 輦車ハ 輦車ハ 輦車ハ 輦車ハ

と東門の南へ入るなり 又云輦車ハ 輦車ハ 輦車ハ

母君もやういふのうらふゆゑされんをき例とてうゑてゐる

あきらまやういふもきや侍は二位にせつやういふをき

あつせまひいふ 女君のうらふいふとあつてうゑてゐる

あつせまひいふ 女君のうらふいふとあつてうゑてゐる

あつせまひいふ 女君のうらふいふとあつてうゑてゐる

あつせまひいふ 女君のうらふいふとあつてうゑてゐる

あつせまひいふ 女君のうらふいふとあつてうゑてゐる

あつせまひいふ 女君のうらふいふとあつてうゑてゐる

あつせまひいふ 女君のうらふいふとあつてうゑてゐる

あつせまひいふ 女君のうらふいふとあつてうゑてゐる

あつせまひいふ 女君のうらふいふとあつてうゑてゐる

あつせまひいふ 女君のうらふいふとあつてうゑてゐる

あつせまひいふ 女君のうらふいふとあつてうゑてゐる

あつせまひいふ 女君のうらふいふとあつてうゑてゐる

あつせまひいふ 女君のうらふいふとあつてうゑてゐる

あつせまひいふ 女君のうらふいふとあつてうゑてゐる

あつせまひいふ 女君のうらふいふとあつてうゑてゐる

あつせまひいふ 女君のうらふいふとあつてうゑてゐる

あつせまひいふ 女君のうらふいふとあつてうゑてゐる

所つひのひより 実加 ゆさうあり

ゆさうゆさうありてつひのひよりありてききくあり

ゆさうゆさうありてつひのひよりありてききくあり

ゆさうゆさうありてつひのひよりありてききくあり

ゆさうゆさうありてつひのひよりありてききくあり

ゆさうゆさうありてつひのひよりありてききくあり

ゆさうゆさうありてつひのひよりありてききくあり

ゆさうゆさうありてつひのひよりありてききくあり

ゆさうゆさうありてつひのひよりありてききくあり

ゆさうゆさうありてつひのひよりありてききくあり

ゆさうゆさうありてつひのひよりありてききくあり

ゆさうゆさうありてつひのひよりありてききくあり

ゆさうゆさうありてつひのひよりありてききくあり

ゆさうゆさうありてつひのひよりありてききくあり

ゆさうゆさうありてつひのひよりありてききくあり

ゆさうゆさうありてつひのひよりありてききくあり

い
あ
ろ
ろ
ろ

石橋延

或抄師鏡川云及々々

瓦橋延

作進
うけせむとてうけとてあつちの海をふりかへて
舟をこえてうきうきとてのちうきうきとて

ふみありきんと

何
文武天官也
已未自通
昭和尙
通

凡^{七十一} 本 羽史蘇是うり姑ん

りえいとうはあんなに人をあひひやうとあせあ

一、向あり

うゝうゝうゝうゝ

おれのおのり
てふふふ

かこゝろめいじん車うろてあめとき

さかひつ

送名彦達のやうふ多きとあるを

心よりお祈りあり

勅使といふ所々

三 位のくゝをとおるゝあゝう

うの停とむ浪抄一日

贈之佳例

清和社外社女蔣山城必宅石墓贈送二位

和秘妙よ正三位と云々

宣光のまゝに
市とあやふ
と近う死人
のじつひつ
ふたりとま
るはこゝに

女御

大納言の女
三右衛門の御
子と云ふ

女御とて例はくはふたふた電をたふすといふ

女御とてふといふ女を不足り
とてせむとて受三臣とて

己未年各女御の御位

いづきさんの後を

の
中
を
て
ハ
女
部
を
わ
り
ハ
て
泣
き
あ
り

を代へて三條より
叙するの後は女御の宮下りあり

又名ハ只位女御ハ三位大納言女との女中てハ女御の御

西の
然と
ぬき
の女
御は
あま
りた
る所
を

世より分仍て位の人より一階とありと三とありとあり

いせのふたりもり

是
全
一
人
之
力
也
不
可
少
也

或妙を碩中云々
佐の々
何送り
ありて
えて
それと
つ

一さうしてゆれに文名に位のをうたれとあうしあうてつた

わあいうえお
かきくけこ

ふゆころ
桐葉のころ

ふせのきつゝ

66
 三
 栗
 子
 日
 如
 紀

糸
うのうのう

汚穢

りやう

んうさいぬ

あつたつりしとさういふさあ

はつたあり

物のかたぬにれ終るゝあひと交はれひさう人のを
相違の交をのりけりといふゝ人のいふぬゝさういふ物を
いせあゝうに人ゝあゝういふゝ今ふあゝ

うぬわゝきぬりてさういふゝさすけあり

ミナナリ
さういふ 日記

是ハ常の候よりさういふの候よりやあゝの付に電をぬく
と帝の政をさすられてぬりゝゆゝさうあゝあゝいふ
あゝゝかゝるを面白くさういふゝかゝることを常の候の候に
人の女房

いふゝ

さういふゝ人の女房あゝの候にさういふゝ

さういふゝ

あゝ付にりり候にさういふゝあゝいふあゝさういふゝ
さういふゝあゝさういふゝ物候の候にさういふゝさういふゝ
或はえんいふあゝのりえんぬいふゝあゝいふゝあゝいふゝ
さういふゝ日候にさういふゝ 或はえんいふゝさういふゝ
おはれいふゝ及ゝさういふゝ

母墓

或はえん

おはれいふゝあゝいふゝ

後のゝさういふゝ

或はえんいふゝ七月ゝあゝいふゝ

はゝあゝいふゝ

おはれいふゝさういふゝあゝいふゝ

さういふゝあゝいふゝあゝいふゝあゝいふゝ

さういふゝあゝいふゝあゝいふゝあゝいふゝ
あゝいふゝあゝいふゝあゝいふゝあゝいふゝ

長恨奇

さういふゝあゝいふゝ

あゝいふゝ

いふゝ

さういふゝ

あゝいふゝ

いふゝあゝいふゝあゝいふゝあゝいふゝ
あゝいふゝあゝいふゝあゝいふゝあゝいふゝ

元和四年四月十八日よゝさういふゝあゝいふゝ
あゝいふゝあゝいふゝあゝいふゝあゝいふゝ
あゝいふゝあゝいふゝあゝいふゝあゝいふゝ

秋にせゝいふゝあゝいふゝあゝいふゝあゝいふゝ
相違の交をさういふゝあゝいふゝあゝいふゝ
あゝいふゝあゝいふゝあゝいふゝあゝいふゝ

後樓

あゝ泣きて人のひひわうう

桐更衣のふけに微殿の

一五九

師如公儼後來薩陀也

三

母桐華一史家元源氏焉あり

此先此より

桐葉更家の里へあり

源氏よりなり
おとろこは後みゆめを合ぬと云ふなり

いふつたれはのうけをひきかへる

此字

何
暴
風

日
あ
ら
そ
と
海

多に遊んで此のやうな風にしてよ、わんざな草花の

或抄碩史の云々
初めつき然儒
れく所より
る付言あり

いふ

將矣

肥
西
家

三、物、乃、自、中、机、之、中、

或抄_二抄字用之

秋凡のやうな時

何れも之を弄るなり

22

西の門は其の威よりなほなほとてかた

ほつろふふふふ

或抄川

いづれもあつらんあきと秋のほふあふらん

ゆきのあはれ

韌
質

題
 在
 大
 河
 中
 之
 舟
 中
 之
 友
 友

う笑と帝 其のゆけり云 鞆の矢野入家と云ふあり

15

清門府

ユチ
しかきり

今頃今の世は内治の外域政を急ぐ中、

昔ハ多クハ号セリ友ト人第ノ中ニ居今ト云下藩ノ外ニ

ありつゝと流るゝあふも長夜わすれと有る心と是秘流し
 案之は義不甘心今付ら此曉何の惜歎不夕月夜今これ程あり
 此の惜歎不 或秘流は義ありきと流しは儼然無所と有し
 りゝあふも流るゝとありふも此の惜歎不夕月夜今これ程あり
 案のりゝあり いたふ末勸 遠るゝと日風集九

抄第のりとうわとくんとくるあつふれりうさる
又或抄に感時必賤用恨別鳥驚心

すゝ虫の声なりなりててあゝぬ疾なりぬるあゝこれ
州名ゆゑに 勢とつててといふんよてててとてなり

或、脚統よりあゝ聲を、乳歯の聲のうなりひきこえてくるは、
 乳をばあやあやうして、乳をばあやうして、うねあやう、乳歯の
 うなりひきこえてくるは、乳をばあやうして、うねあやう、乳歯の

是の如し

心車小のりあひあひ

あはれいふくちうとてさうふくちうとてわら
うふくちうとてさうとてさうとてさうとて
さうとてさうとてさうとてさうとてさうとて

いゝうゝ虫のさうけいぬは芽生れ病候けりまゝの雲のうへへ
 文家母の也きと家傳りすふても虫の音志を納りいひ
 ちやめりきりけりまゝのいひの所候は今う想ひ候きり
 おのさゆりまゝのいひの所候は今う想ひ候きり
 文家の所もまゝのいひの所候は今う想ひ候きり

乙
 舟の傍へくまふ船がたは醜陋の名をとりたるのみありき
 此よりとて更に衣用を

月毎にやまの袖とてうろ病玉をうけ杖のうろも
 昇殿の人とハ男やともいふはとくありあり
 或は云々

初度児はなと何雲のふと戸をあきく人のふたねとを
かゝときふいへる人にかゝりてをむかう

是を^{ヤコト}かたの^{ヤコト}折^{ヤコト}き^{ヤコト}てらひ^{ヤコト}く^{ヤコト}そ^{ヤコト}も^{ヤコト}あ^{ヤコト}る^{ヤコト}
眼^{ヤコト}を^{ヤコト}今^{ヤコト}のを^{ヤコト}少^{ヤコト}事^{ヤコト}に^{ヤコト}あ^{ヤコト}る^{ヤコト}の^{ヤコト}奇^{ヤコト}に^{ヤコト}を^{ヤコト}思^{ヤコト}ふ^{ヤコト}

[illegible]

多き事なりとも今ハ氣傷けおるもの、又衣の所にて

御之

記念 延紀堂

信ヤタシ文集

水

そのまゝの一紙

此
 長根舟の地より長一町と云
 相文衣の取よりそくぬきぬ

みうあけの

泉
み
ろ
と
ま
は
な
へ

ぬてゝいづれに涙をとり着く女
 世に衣の下常は髪をわけらる
 女は

内々房ハ膝の付ハミ
あけとてんうあうて
整ひてぬ

つわろしきみてうとうくさいぞえゆき

新古今物語のあけと三月の末はあまの宮にうつりて

九集そやきすつろりろれはハわん
鯨^{クジラ}海子^{ウミコ}若^{カハ}指^{ササ}ホッ彦^{ヒコ}蓋^{フタ}を

天武十一年六月丁卯男女始結髮以下畧之續日本紀

232

花
はなふみのういやくんぞろこ

あまのうへに

或抄文名のりいふに

新とうふといふはなれものなりさか海のものなり

孝子より一のゆゑに内より可なりとて

おふれ、更家の子ありさうなれうんとや

三

寂寞

和名

或用よきき

人の所ありて

ふくしやう

ろりり
えんげく肉へあせうとあり

三ノ

くはくちの

あなのみを

一

江
魁
灌

月せきり ねりあきり
 けしきり せきり

海にまはるゝ

己の己の故郷の故郷の故郷

イ
イ
イ

早迷

或清之竹畧

虎
ぬ
へ
う
い
お
お
と
の
あ
り
や

あふゆかりんとうをいふなり

糸
時の海を表し
足音を

あといふに御寢を

かまのつみせんぶのさうり

はつて是後ハハナシ

せんふくしとて或はまをぬくこと桐葉集とてふべしと

上
行
名
吳
說
不
用
く
不
ぞ
ん
さ
い
ハ
中
に
此
一
卷
あり

五戒

清涼及東庭聚同西庭

別餉而王屋過所
亦被戰前氣

延壽丸右衛門

栽草架

中文をねえあゝ秋の風をねえええ秋風は強くて

天曆所紀

秋風よふく葉を落しゆくを
と何よふらん

或秘妙庭の内小結をとりてけしきあり

水々々々々

希載の病乞のさうりなをいぬ境より

あゝと云ふの如く云ふ

御

帝は伯あつて何うぞとあつて

つゝ明るるにやる長恨新花御鑑

何亭子記七卷以商他

小治以東一町

伊璠集卷之七恨水屏風亭子記

うゝ所の石とくせはくくし門の取もく

ね葉のつぎよりいふ物いのそふ秋め
なまこにありやう

花眼かたけの江紫のふりつれきの一首、帝江のそと村

伊豫集小のせしとハ亭子虎の御製よりて云々

いづれもこれの何れを以て云ふに依りてあるを要之の所

[illegible][illegible]

去冬
通ミナ
憲ノリ
法
中

法名
信西

唐書曆楊妃外傳等之書也

く 結ぶ うちと 今世は 八世 恨み 結ぶ 中 納め 是 故

五法の氣を金、水、火、土、木と云ふは、
 後白河の御時、
 金、水、火、土、木

ふりよるゝくそけつをその薬本衆に与ふ

女事女福已矣乃復樂子乃

宝蓮
西一紙

糸
凡て物は、ふくまへるものなり。雪とありては、

翁

名月、少く伊豫の集、いづくも恨み、海風亭子、あゝあゝ

市をくぐりて
 せほり市門の
 所はあそび
 所なりて

つゆかりきさいのまはあづき月とゆきちるはるの笑ときて

かくつちもさそふ風とぬ
 乙世にさう多れ帝より
 延祚の

帝一萬りきり御宝物の内よは強は目録よ今うきあり

御
 うつゆふはろくしりなつてあて玉れけりけこそとろく
 のうかろくハ方古れり
 幻術士の巻
 玉のろくハ魂風雲
 秘術とて方古やうある幻術れきとわハりりある有とてふ
 もろくしりなつてあて玉れけりけこそとろく
 御川所歌

冬ふきやうきひのふらハ
を
長恨歌よけそふ

奧入大液芙蓉來央柳
 芙蓉如面柳如眉
 對此如何不淚垂

筆
乃り
なり
きん
ひて
ふあ
ひと
あ

和之爲曲玉爲之

心者不盡其性者不盡其情性者不能盡其性月者不能盡其明性不能盡其性泉者不能盡其性

多えんはゆき

い
後為^レ取^レ末史^史柳^柳の一^一分^分

うせきしつしきりそひりふて自毫ち毫て実じつ根こんは源親のそふ衆
院の女ふは女とあひ二月りりて若柳はふくふり人のふりり
柳はふくふりてあふりて一院の内にあふりてふくふりてふく
英若柳はふくふりてあふりてふくふりてふくふりてふくふり
りて自毫親のふくふりてふくふりてふくふりてふくふりて

ちうれと後ハ一向は畧しうとや相違ハ未決柳の月を
 成秘抄新と云ふハは辰の月お遠くきよは通ひありしうら
 わいしうめいしうきんしうをひしうしうくきうらふしをき
 きうと云ふしう月をいふお近なり

冬

束尖柳喜衰紙ハ多子細名能致也又或秘抄芙蓉柳也

中元小僧のうらハエも丁度なれどもお家様も何うぞうふ
ハエのいぢやんとし抄云々此ハエのうらハエもお家様の

とんりり
是又一
とんりり
或抄之末、決柳、此句

と後成るるに昔親の父老のふとて

ハ楊妻此ハ菱花柳　ヨウ人安良トハ女郎を極めよた
と皆二白クカミレタハいりあるあさハミヤの傍に

えいそく 歌ハ自由の心 以テ 自由の心ヨリ せらる

宝武
 甲子
 月
 日
 時
 の
 人
 を
 れ
 戸
 合
 子
 名
 う
 傳
 れ
 部
 と
 為
 業
 の
 出

[illegible]

人あさみあよりきりてあまのあけなり

紙より定ぬるの印は
けりとはせん後如く
尋ねん小字は徳

右をたつさるゝのあり

亥一刻をて夜の人初夢時初刻初酉一

刻右近赤宿申亥卯一魁内監亥一刻養宿簡

或秘抄云を赤の秋のときを右のを赤あゆとめつり

養樹樹といふに亥ノ一刻よりうききりて卯刻一刻は夜を也

一刻より右をたつさるの升やそれハ夜のつけさるふと出あはせり

右を赤のあつた時とすに亥刻始りたを宿の友人夜ハ

くく時と養するに酉一刻より右を赤たつさるの升や

そて卯の始ハ夜のわき付と養をねあへくとの升は養を

今夜有出さるに辰を赤た友人上日と夜は養をさる養を

人めあつて夜のあつた

たわりの夜を也或秘抄云はつりふ久あかり

わきもききき

亥のときとすに酉一刻より右を赤たつさるの升や

そて卯の始ハ夜のわき付と養をねあへくとの升は養を

今夜有出さるに辰を赤た友人上日と夜は養をさる養を

人めあつて夜のあつた

たわりの夜を也或秘抄云はつりふ久あかり

わきもききき

亥のときとすに酉一刻より右を赤たつさるの升や

そて卯の始ハ夜のわき付と養をねあへくとの升は養を

今夜有出さるに辰を赤た友人上日と夜は養をさる養を

人めあつて夜のあつた

たわりの夜を也或秘抄云はつりふ久あかり

わきもききき

亥のときとすに酉一刻より右を赤たつさるの升や

そて卯の始ハ夜のわき付と養をねあへくとの升は養を

今夜有出さるに辰を赤た友人上日と夜は養をさる養を

人めあつて夜のあつた

たわりの夜を也或秘抄云はつりふ久あかり

わきもききき

大床子に居る八友と人の居る所へ移りてあるは物なり
もろくも能く此の門の法をいふてゐるは
きつ付たれは居るへきなりと云ふなりと申
はかりに物にいとある一友はあつて居るの女房に
とらうとてあつて居るなりと云ふなりと申
つてあつて居るなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
二友の所へあつて居るなりと云ふなりと云ふなり
いふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
それとも何つて居るなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
して居るなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

前へ居るなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
相なりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
あつて居るなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
相なりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

いふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
いふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
いふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
いふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
いふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

いふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
いふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
いふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
いふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
いふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

いふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
いふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
いふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
いふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
いふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

いふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
いふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
いふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
いふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
いふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

月日會々々々文氣の如

源氏玉眼の目好色く衆肉

このおのゝ

人君の心を

とてりあ

防さつりふりて

相傳に水門の第一句と云ふは東薩に

中にて長きよきものし、長文のものに、素目名を付けしと云ふ。
くわつよりきるの舞、よく前席より一林を、六條の水
是所の内、あゝいふは、けり。現存とも、近世皇太子又
彦早草より、さきには、物語の前席は、けり。さきよりや、と、条
院の、一條院へ、長文と、たとえ、天皇、あり。けり。物語の後、
といふも、女例、多しの、何れ、なり。

或抄是勤 九强同御况 旗

旗之筋路と云ふは義経退了

ては多く人の脱離の時代である。又廣く保明、薨後と云ふ夢松
立坊より早世の後、朱荇虎立坊（日耳）として翌三年小
東文と云ふことありて相違帝といへ延壽といふ延壽にハ東文
二人を保明と云ふ一番、立坊又一歳ありて薨せ繼号又廣
と云ふことありて今日五月六日の新祭の末の約出ありと云ふ
夢松就王と云ふ此邪れよりして早世といふ夢松帝朱荇
虎といふ延壽の取柄とつたところなり。程よくいふのであつて承安
元年春虎小換しる刀より先坊といふ廣と云ふは似せり
いつても坊れなり。ろさる。

いふは坊主のうさぎ

きこゆなり

源氏とあるよきやと相希れり

是漢高祖才一子名後の惠帝とて一王と電電の
威丈人後の趙王とて一王と電電の
そとつて一王と電電の
て惠帝一付とて一王と電電の
らととて一王と電電の

子房用之掌教四皓而立惠帝
或抄素書曰設愛教權所以解

なりこそ有るれとて
せも此のよきやとて一王と電電の

或抄是る後之世にたれは是とて一王と電電の
或抄是る後之世にたれは是とて一王と電電の

女房も此のよきやとて一王と電電の

源氏とあるよきやとて一王と電電の

或抄是る後之世にたれは是とて一王と電電の
或抄是る後之世にたれは是とて一王と電電の

或抄是る後之世にたれは是とて一王と電電の
或抄是る後之世にたれは是とて一王と電電の

或抄是る後之世にたれは是とて一王と電電の
或抄是る後之世にたれは是とて一王と電電の

或抄是る後之世にたれは是とて一王と電電の
或抄是る後之世にたれは是とて一王と電電の

皇子七少御書始例

兼平二年三月廿一日

一條院

寛和二年十二月八日

師書始八師註孝經成貞觀政要七讀始為之師經孝經後
玄宗之朝博士讀書師註孝經五字尚後云

は計次尚懷流五字如光皇太子親王ホの書りりり

うろく 藝文
秘抄 西文 江次 少木 川 畧

わづらふにぞうきんを

何れも有りてゐる

なりぬ人を帝の心なり

くさくさ

母文の好む所を以ての好む

とあるものきこたり

尺五寸五分

しゝはさあさへあさるゝ

うくきふたういふぬ

5

天物於木女五於人同常與杖天降僇

奉^{四ノ}
物部氏を征天津麻良神代小呂取テ天孫天照御
時降ニ凡クハけりゆリヨミテ凍波の島於と領シテ武勇凡ク

と掌　　之　後　勇　を　示　す　の　ゆゑ　の　ひ　あ　る　り　ん　なり

わさくら

6
 歟
 又

既
日

悲
月

うゝあらね

以微
殿
子
以
獸
却
子
子

女
子
二
所

源氏のつとむらへ朱薙虎一脈

朱荻花 許海山

女一爻
日辰

女
乙
文

而後為人前受而後公中啟

あやかし

此
文
之
中
所
載
之
事
實
與
前
文
所
載
之
事
實
不
同
也

師子

或抄安ハ女文二下トハ徽殿女御との事

又云、公取是才の女ありと、又自余の女也と

子

もあつては二のくを落しうたやうなうへを

女帝の命を以て天下の安んずるを以て

うゝありたりしを

[illegible][illegible][illegible][illegible]

92 E. 37

卷之六

地さくちあらはれしをひそめたるものぞは月雲の衣

つよのちりん
まへはまうら
うきエウラ

是ハ句海さう
かーろわをひきまふらるるなりと云に
丁々ゆえの音ありて

に
筆離蒼君頤公扁云頂耕反俗云蒙乃古蒙形似

琴絃有十三絃柱高三寸
風俗通之本秦壺也

橫笛律樂書圖之膏款和名与古不仁木也差漢張騫使西城苜蓿一匹

風俗通曰武帝時丘仲取造或黃帝時伶造之
言乃介以人傲天の也

うそそありぬき　わざりうらなよそふたつものもいひ
つけぬき　かそくのそんがとれふことゝあまの地
おろしものもいふも　　^{ユニウ}　高瀬人　　^に　恵神天皇は八年高瀬

王を使胡貢　ひくハ三韓と云ふ本胡くうと
仁徳天皇は時王にまのう　渤海客と云旨は對し

文のゆゑなりとて多分を以て思ふ。然れども
に寛永遺藏の外蕃之人必召見者在簾中見之不可直對耳孝

環朕已失之慎之

是と衆多の違ひの如く蕃客の

夢よあゝあゝあゝき世と世戦といふもあやうあらるは
 いづれいつたれさうな世のよそに付のかみようなみえ又
 はかばか勅割わたりたるつゞく是とさうははみさうて
 ゐううへさあめいあやうくま市に居うんとおぼゆひん能
 なる料算をえてみよりのうたれ

寛永の所達 誠小必るうんくかこさまつる必のなれんハあふれど
叶うも付のゆしそあふらうせそハ先さう御きさう
すのゆをいふあふれらう 或所ハ海より見ふ能く

必の字眼（うら）ゆをぬけありと

鴻臚ゴロ鉞ヰフフフフフフ

四年以玄書奏

鵠臚鼓ハ玄菟橐。ありハ橐乃ハ鵠臚。中ハ号ハ玄ハ橐。ハ
 藩ハ玄菟。藩ハありハ橐乃ハ鵠臚。中ハ号ハ玄ハ橐。ハ
 一。橐乃ハ藩ハありハ橐乃ハ鵠臚。中ハ号ハ玄ハ橐。ハ
 橐乃ハ藩ハありハ橐乃ハ鵠臚。中ハ号ハ玄ハ橐。ハ

七

右大弁子所解

以舟往之乃成

之故也又漢胡尚書扁鵲之友也仍曰含鵲舌香丰握榮
故云握榮之藏也

故云握榮之藏也
字畧之文文
 人不居之守

樂

私藏原云官中夏大弁所執の仍室

抄西

うんたけつてお人よ名大舟のみうてわろふり

おそる

將

おんあま

中
右大井の子と云くは先不審なり

或抄中御流に於て有り

河三代夷徠仁明喜祥二年勵海

容光孝天皇に就ておぼろけにて必天位よのりきつのお
あつたなりとてふ外史記おとけり畧く

15

大流の勅物云々元帥之延任の時時失必のお人等又天官之筆中
 小ありしと云ふ所を云ふの曰は人必しうう九多と少下之勢を此所
 小計とて天官とてしておありす先防保左大長時右大長蒙家列家列家列家列家
 物よりして相して云々一人常家と能ふよりして若くは
 りん若くは云々一人常家と能ふよりして若くは
 依給お人必しきりてして云々一人常家と能ふよりして若くは
 かく久しきと云々一人常家と能ふよりして若くは

西文

五言古詩
五言律詩

崔氏西

時之人号

西文

不ノ名ハ
よるわつ

物交者大長實之乎木畧々

或記之西文者大長の筆に結なり。あひけり成体し別當意平と云
お人々々々客息人あすも是處よりいさるゝかいらきんとすれ
かめりきううゝ海をふて背よ若相を恐くハ誘ふよ起らぬ
てゝとちやうり高森人の内よりえ源氏ヨ弥勢お恐ゆるや
ろろんとまりお解る也云成西文

和漢雅詠一同元笠原

和漢圖說一圖元筆

凡の事をもめて帝王の如くたうに任

乙
 必のあやふと平常虎の

[illegible]

守の

[illegible]

秘

[illegible]

そとより九條抄りくくく署く

弁もいさうくくく

の杜使 或説云くは使藤のり

中々あつたふと業之和漢あつたふとくくくく内教のくくく

そちのくくくく一課合点右大弁くくくく

或抄され字違へくくく一課説くくくく

そゆへにそのくくくくくくくくくく

くくくく 天保二年始置文章博士 漢書曰明於古今

温故知新之博士 以外何事署く

文のくくく 或説くくくく連綿文粹多

秘 延和八年夏後に相公胡蝶はくくく番客氏送る時れり云

前途程を思ひ居山暮云後る朝露凝けつ肌之曉之露

或抄えは時番客用とあり 感くく後教も氏ゆくくく

何ぞ云胡蝶と云の位はくくくや若く云いさくく海人云目

心ハ學々とくくくあはくくくくくくくくくく

くくくすくくくくく お人の原氏れくくくくく

感懐日本紀よりやれおくくくくくくくく

路の若所の出くくくくくくお人のありくくく

みくくくあつたふとくくく 源氏のゆり結語あり

或抄くくくの物語云くく大輔右大弁くくく

ありきりくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

これくくくくくくくくくくくくくく

き方のくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

いさくくくくく 長梅くくくくくくく

秘 義云くくくく小因大果之道理ありくく

くくくくくくくくくくくくくくく

あつたふとくくくくくくくくく

あつたふとくくく 帝くくくくくく

あつちへ

隠密のふと自然なあり

始ハ名大奇のあふゝあまゝゝ高森へあてふばふのちりな
とつてそゝゝ水原のふゝゝ

新

朱子外祖^ノ友^ノ父^ニ氣^ヲ取^ル長^ニ時^ヲ有^ル長^ニ

いふふふふふ

高文正公集

みづゝあきふゆふとさう
あせ

に
お
ま
の
お
し

後原伸ハシノハ完カン孝コウ天皇テウ皇スミをオホそスるヲ慮リおホろス明メイ乙ヲおホろス （信）

五

倭必お人々を
殺すべし

おまゝぢやないさういふおのせうといふの事歟やういふおとといふ
不愛し但おのれが保つ字に課賦トクハクにハクおののおとといふは

是祢若虎の兄、
乃弟也。然ハト云フ義又必也。

今れた所とそ
とくよりいふ
と家のおき
そおそれ
のうそ中交
宿交友風人
よむせうそ
うへせうひ
まねはるれ
かへせうひ

新玉は暖いさうに伝わり
あまのほろとて御門へ
こきおをさふ
とりひくありしうらぶるも
しむべきもあやかりあり
ゆゑいそをおもはるるけり
ありしうらぶるもあやかりあり
しむべきもあやかりあり

しるしをいふて、帝の所へお人のやゝお尋ねし、
 ぞうし、これと、うは、大鏡よ、お人、お尋ねし、
 是ハ御堂実白の公、お尋ねし、
 大鏡よ、お人、お尋ねし、
 大鏡よ、お人、お尋ねし、

これ必其人渾覺する所なり又古の鏡よ之防時年

菅原河原
なり
時身信云、
河原なりと
見ゆ、
おどろ
けり

下少々久々世に於て
寛平九年

あはて三人のゆゑ及びん眞佐とよむれん必向後より夕き

世に覺せらるゝ而て依之才一の姫君、臥床病癒の爲に對ふて、

娘の氣のつとむ
 眞信云はる時冬冬の大斎を寛弘法宣司

東の對は
おつと
えふてく
り

[illegible]

之茶、桂玉亭の茶、

[illegible][illegible]

の字のト 通名を以てする所の 隅々たるものな

4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525
 526
 527
 5

けふあまをい
 づりやうに
 づき五月に
 けふあま
 うてこのお
 ちるはのち
 んよりうさ
 おいりつたよ
 そいざう
 お家のわち
 ぬくくつれ
 いづつと
 ぬきれ除物
 十九丁々
 けふあま
 いてに
 そあは
 とあは
 といふ
 といふ
 といふ

式曆

儀式 十卷

年中行変

外記廳例

弁官記

叙位例

除目例

外記亦文書目録

政理事

十部

群書治要 五十卷

貞觀政要 十卷 已上唐書
但君臣之間變片以書

諸司式 延喜式五十卷

三代格 谷三十卷 今案式有曰十二卷

天長格抄

官奏報 申文例本
宣旨目録

交替式 三卷
但勅式一巻

勅解由使勅判 新定酒式

罪法事

三部

律 十二卷

令 十卷 相兼政理方

類聚揆非遠使宣旨

勅記変

諸難変

類聚国史 二百卷

け等ハ必下れそのときを

きん

源氏こいふあれて

あふはいつわしき

秘 案云とハ源廣文時その御書

トありし明鏡あふは眼とけり

世のうひあひめく

天子は後をとりしつるものうへ

そくえりて

省曜道より又八省九曜之行

とて運命と勅ゆ

弘法大師入夜時省曜經六十卷後之

近代綴之

省曜道ハ斗道の法作 和抄

源氏あふ

嵯峨天皇弘仁五年五月八日男女

都元人賜姓是源氏の始と大乳序分七種よりハ略

の云代々源氏 大乳外傳

た大乳信

た大乳常 大乳融 弘仁

た大乳多

右大乳完 笠兼和

た大乳能育 天女

た大乳高明 大乳兼明 笠延和 笠又畧

花之延和の御子高明親王ハ之服ハ源氏の姓と為六葉氏

之例ハ秘抄載之

三代のまづし

三代のまづしは 是より一々文はきつていふを能く
或抄にぞん考す多能くしる能くしる三代のまづしは
さしきといふなり

きさのまづし

是又まづしのなり

是は初先帝ハたりしゆこそ名まづしかりしとてさうきつて
考すは唯しなりき可なりし能くしる能くしる三代のまづしは
氏ありしなりしとてさうきつてさうきつてさうきつて
まづしとていふはゆき先帝のまづしは
さうきつてさうきつてさうきつてさうきつて

いさのまづし

こはまづしとていふは似たりしなり

れはまづし

わたりし能くしる能くしる三代のまづしは

れはまづし

わたりし能くしる能くしる三代のまづしは

ゆきまづし

こはまづしとていふは似たりしなり

有代帝のまづしはゆきまづしとていふは似たりしなり

まづし

是より一々文はきつていふを能く

まづしのまづし

は微殿

まづしのまづし

は微殿

は微殿

まづしのまづし

は微殿

まづしのまづし

は微殿

まづしのまづし

は微殿

まづしのまづし

は微殿

まづしのまづし

は微殿

まづしのまづし

は微殿

まづしのまづし

は微殿

まづしのまづし

は微殿

まづしのまづし

は微殿

まづしのまづし

は微殿

まづしのまづし

は微殿

まづしのまづし

は微殿

けろろ

は 諸

受法

信

けろろ

秘をては法中となりけり

秘を理運ふ家柄あり

あつたわと友達の族姓なり

お家の族姓よりなり

れんてゆ

お家の

家系

あつたわと

お家の族姓あり

秘あり

こころ

お家の

家系

お家の族姓あり

源氏の

お家の

家系

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

お家の

菰葦たういあて
水石のまじりく
なれくやく目
みとやめ

あつた

この是れ亦うへすゝ
源氏物語の臺架あり

てうろりるるありるる御門のるるるる

人生十二一周ト云
げ年流るゝ如漢の例
け外畧く

一 世の源氏之服の式はういふなり

といひけり
朱荳乳立坊以後の取之紙なり

に
糖
ヨリ
シ
ヒ
日本
紀

とろくめふ
つるさかん

所々餐居子

膳二百

以上應和削

內苑寮始丞史生四貞

南角地東西各亦

私心內斂
素欲必之

...

穀倉院二象南
納夷内流石鏡子主位禰西及没官田太

肉

才所ハ又幾内流氷の海を以て往來便なる所の稀なり

...

中麿寸

笑之

10

1

10

西より大長き明小念の中書王兼明二人保氏とて一衣え振付を
建行ゆりて世よすもさうりて衣をさうあてて世あふ保氏
ふあねいづれも迄衣の衣あふりやうける代りうてさあねと
ちんういふ。

二、あやの山屋へ入いの山たふのいふあ
二、あやの山屋へ入いの山たふのいふあ
二、あやの山屋へ入いの山たふのいふあ

いふあやの山屋へ入いの山たふのいふあ
いふあやの山屋へ入いの山たふのいふあ
いふあやの山屋へ入いの山たふのいふあ

いふあやの山屋へ入いの山たふのいふあ
いふあやの山屋へ入いの山たふのいふあ
いふあやの山屋へ入いの山たふのいふあ

いふあやの山屋へ入いの山たふのいふあ

いふあやの山屋へ入いの山たふのいふあ

いふあやの山屋へ入いの山たふのいふあ

いふあやの山屋へ入いの山たふのいふあ
いふあやの山屋へ入いの山たふのいふあ

いふあやの山屋へ入いの山たふのいふあ
いふあやの山屋へ入いの山たふのいふあ

いふあやの山屋へ入いの山たふのいふあ
いふあやの山屋へ入いの山たふのいふあ

いふあやの山屋へ入いの山たふのいふあ

いふあやの山屋へ入いの山たふのいふあ
いふあやの山屋へ入いの山たふのいふあ

西文之類

又、衣領の平に黄衣
 也、其の冠の体、而

康保二年八月御新下侍东才一間旅立麝鼠之中土鋪二牧
菌一枚とぬき親王衣とよりとりて西文とてより

新之助との次と下作とを互に代作といふを

御そまゝ 2

必之帳ノ後物衣才童のけふうりなきに

童稚の時ハ赤みの額頤を黒く及この童に赤みえ後
 後ハ源氏君ニ侍りて 衣服令之ニ位ハ黄袍 西文記ニモ黄衣
 と云ふやうえ後の後ハ縫衣の黄袍なりと 但延喜式縫衣寮
 式之ニ位ハ黄衣とは小きつゝ長和二年三月廿二日修成記ニ
 郭冠あると云ふ黄衣 黄衣は世潤之黄衣は此のハ縫衣寮式の黄
 衣との字に合ふと 世是と黄衣と兼せると云ひ代はしむあり
 有るより此のハ黄衣就其ハ服式ハ縁袍と云ふ一付も縫衣
 或は黄衣ハ二のハ有るやと云ふ黄衣といふし時ハ令ノ文ノ黄衣と相違
 のれと云ふといふやと云ふ縁衣といふは方也權名のつゝ所詮は物
 相違のみといふと延喜帝といふあつては長和のちなり

乃て洋

え娘のあやうき黄衣と有旁黄袍の混とて自ら
私親王の地ふりり入と東庭におわとけ舞

大子ハ笏御衣御袴袴りしとて薙とふとて服あり

淚

保氏よりえ紙の節或は善文のふりなりといふ

とありて、豪よりい、門も程の取心のうちありて、みづ波は
とん／＼とつゝや、日親王以下之衆の、時ね、舞ハ皆、信濃友の、赤
庵ありて、水ありて、む／＼と有る、と、御え、賑ハ、當殿ありて、れり。

是堂と少くも所を二
或は去る所之振るを
教へ堂と

少之解之是
平下少て
而多不腎液
也之候之云

とく只海成の海濱を退却せん其の如く

義之一說源忠容錄云云

足とつち

[illegible]

おもしろい話のいふは

[illegible]

成務元年

海へつとあるうふ文衣のふけうにまをるを感懐深

まゐりなす

雅
日本紀

或、草のみ葉のやうなるを

秘
小うらふハ女房あつてハ志をぬき父ハさういふうぬで程々しきもの
有ニ素累多く大長ハ白^{シラツル}橡^{ハカ}の雪衣紙加ふ 在在九三内侍傳々

飛
語
涼
友
少
前
一
方
儀
と
也

西文をくみ取おの縁廊ふさうぬ酒者いもう年にお酒をとり
いふことなりゆひふあうさ世に笑ふふはじきいふことなりや

雅イトキナキ 日本紀

いふけあふ八癖よりいふたあふよりいふて
るあふ院

[illegible]

私加冠の人よにけらくぬふおきてはえ振のりて
はつひよりつるな大衆のむそあはるはかのあつしを

御心入なり

葵子の会作

七

とつゝいともいふもゆひくあさけう路のみーあせまは
なぐれ風帝へありき返あこ今日加冠の人をばけりといひある
東のうめへさうきけぬいゝあさうとしうにゆゑされたり

いひのふれ、源氏の取方ふそんりとし

天に祈るやとていふことあるなりゆひに我れはあつても
依忠え様の疾癒を乞ふ候る

日接連

ゆいせしるうりゆいのこふえのふりうとそふ
男のゆいせのいそそわせうた八雲にみれうり
あふふと但天のふあせうんと後撰をさめあれうるふ

新玉の駿夷と云ふ駿夷はあつてきき処に夷はぬいらるあし
るあしはぬいらるあしぬいらるあしぬいらるあしぬいらるあし
ぬいらるあしぬいらるあしぬいらるあしぬいらるあしぬいらるあし

秘 在
しゆいふてをくそをさうあつ又女御であつていふこ
思ひあつて女御を又今いふ眼をいふ家元を原にさうあつていふこ

なつ

の
て
階

舞ヲ踏父

の衆は之の端を去るべし

毛猪といふ御方よりあるへうより痛し大に肝はけりなき

しゝるて川入の大光寺もこの瑞よりてふてふと云ふのありて
風角のくぬあへしきとて 瑞端志ゆゑ

瑞端志ゆゑ

瑞よりてふと云ふ

なる寮に御するとあれなる寮といふた

のつゝこれとてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ
瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ
瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ
瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ
瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ
瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ
瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ
瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ
瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ
瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ
瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ
瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ
瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ
瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ
瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ
瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふ

天慶二十五年

瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふ

瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ
瑞よりてふと云ふはふたの瑞よりてふと云ふ

けふはふとそくちておひつゝあひさるやうにあ
 たらしいこの世もふとしの御いかにうきをうき
 そのふつふいわり



